

## ADHD児の自己評価とその原因帰属に関する検討

佐藤正恵・菅原由香\*

### I. はじめに

注意欠陥多動性障害をもつ子ども（以下ADHD児）は幼少期からの失敗体験や叱責の積み重ねにより自己評価が低下し、それが後の情緒的問題など二次障害につながるものが繰り返し指摘されている。しかし、そのほとんどは経験的な言及に留まり、実証的な検討は十分であるとは言えない。ADHD児の長期的な予後を見通した心理的支援を行っていく上で、彼らが自分自身をどう評価しながら成長していくのか理解しておくことは極めて重要である。

ところで、従来心理学においては自己に対する認知的、情動的側面を含む比較的包括的な構成概念として「自己概念(self-concept)」という用語が用いられており、自己への評価的側面である「自尊感情(self-esteem)」や「自己評価(self-evaluation)」はその重要な要素とされている(榎本1998)。子どもに関しては、Harter (1985) が自己への全体的評価を自尊感情とし、それは学業や行動など個別領域の自己評価によって形成されると指摘している。そして、尺度として「学業能力(Scholastic Competence)」、 「運動能力(Athletic Competence)」、 「外見(Physical Appearance)」、 「社会的受容(Social Acceptance)」、 「行動(Behavioral Conduct)」の5つの個別領域からなる自己評価 (Domain-Specific Judgment) に、全体的自己価値 (Global Self-Worth) を加えた Self-Perception Profile for Children (以下SPPC) を作成した (Harter 1986。訳は桜井1983, 前田・上田1996などの先行研究に従った)。ここでいう「社会的受容」とは子どもにとって重要な他者である友人や仲間からの受容を意味し、「行動」とは自分の振る舞いが規範に則ったものであるかどうかという道徳性に焦点が置かれている。また、「全体的自己価値」とは自尊感情のことであり、今の自分に満足しているか、今の自分をちょうどいいと思っているかどうかを意味している。

わが国でもこの前身の尺度が桜井 (1983) によって標準化され、その後各領域6問、計36問からなる「日本語版SPPC」を用いた健常児の研究が行われてきた (堤ら1990, 前田・上田1996, 前田1997, 眞榮城2000)。これらのうち前田 (1997) は、小学3～6年の児童を対象に自己評価得点の性差を検討した結果、「運動能力」と「外見」では男子が、「行動」では女子の方が高かったとしている。また、眞榮城 (2000) は各領域の自己評価と自尊感情との関係について、小学生では「運動能力」、「学業能力」、「外見」、「社会的受容」など比較的多くの領域の自己評価が自尊感情と関連していることを明らかにしている。

---

\*秋田少年鑑別所

他方、SPPCを用いたADHD児の研究にはHozaら（1993）やKaidar（2004）、田中ら（2005、2006）、中山・田中（2008）などがある。中山・田中（2008）は、SPPCをもとに作成した計26問からなる「日本語版自己認識尺度」（Tanaka, Wada, & Kojima 2005）によって小学4～6年のADHD児45人と同学年の健常児198人を比較した。その結果、ADHD児は「振る舞い」（SPPCの「行動」にあたる）と「社会性」（「社会的受容」）で自己評価が低かった。また、Hozaら（1993）は行為障害や反抗挑戦性障害を合併する23人を含む8歳から13歳まで25人のADHD男児を対象とし、「行動」のみに自己評価の低下を認めている。他方、9～14歳のADHD児を対象にしたKaidar（2004）は、「学業能力」、「行動」、「社会的受容」の自己評価と「全体的自己価値」が健常児より低かったとし、先の二者より多くの領域の低下を報告している。

また先のHozaら（1993）は、ADHD児の「社会的受容」における成功や失敗の理由を自己や他者など何に求めるかという原因帰属と抑うつ感情も調べた。その結果、ADHD児は健常児に比べ抑うつ感情が高いにも関わらず自尊感情は低くなく、また健常児と異なり友人関係における成功体験の原因を自己に、失敗体験の原因を自己以外に帰属する割合が高かった。このことから、ADHD児は友人との否定的な体験で自己の内面が傷つかないように自尊感情を高く保持しようとしたり、失敗を自己ではなく他者に帰属させるなどして一種の防衛機制を働かせているのではないかと考察している。一方、わが国では田中ら（2005）が、小学1年から中学2年まで28人のADHD児を対象に「学習」、「運動」、「友達」、「行動」の4領域の自己評価とその原因帰属について調べた結果、先のHozaらとは異なり、特に否定的評価ではその原因を全体として自己に帰属する者が多かった。このことから、ADHD児は障害特性からもたらされる多くの失敗やそれに対する叱責・非難体験によって必要以上に自責の念に駆り立てられているのではないかと述べている。

以上のように、ADHD児の自己評価については同じ尺度を用いても統一的な見解が得られていない。その要因として、対象に行動化や攻撃性の激しい反抗挑戦性障害や行為障害の併存児を含んでいるか否かや、対象児の年齢幅が小学校低学年より中学生まで広いものから小学校高学年のみと狭いものまで異なることが考えられる。このうち後者と関連する自己評価の年齢的变化については、外山・桜井（2000）が、小学4年生頃になると他者との社会的比較においてより客観的な評価が可能になるため、子どもの自己への見方が厳しくなり自己評価が低下すること、中山・田中（2007）が小学校高学年の間は自己評価および自尊感情に変化がないこと、堤ら（1990）が運動能力以外の自己評価は小学生より中学生で有意に低いことを報告している。これらから、児童の自己評価には大きく小学校低学年、高学年、中学生という発達のな変化があるのではないかと推測される。そして、これらの中でも自己を客観的に捉えられるようになる小学校高学年は、発達障害をもつ子どもが二次的な情緒障害や不登校など不適応行動を増大させる時期である（上村ら1988、隠岐ら1989、佐藤2006）。従って、この時期の自己評価について検討することは臨床的にも重要な意義がある。

また、自己評価のみでなく、そう評価する理由を子どもがどう考えているのか理解することは、特にADHD児の心理的支援を考える上で重要な手がかりとなる。その際、自己評価の原因帰属は、運動や友人関係など領域ごとに異なる可能性があり、個別的な検討が必要と思われる。しかし、今のところ「社会的受容」に限ったHozaら（1993）の研究や、帰属の全体的傾向を示した田中ら（2005）の研究しかない。そこで、本研究では小学校高学年のADHD児における各領域の自己評価とその原因帰属について、非ADHD児との比較のもとに検討したい。なお反抗挑戦性障害や行為障害については、特に米国では合併率の高さが報告されている（APA：DSM-IV-TR 2000）ものの、我が国ではこうした障害をもつ子どもは医療よりも司法領域で対

応されていることが多いと推測され(上林1999),その実態は十分明らかになっていない。従って、今回はまずこうした併存障害を持たないADHD児を対象とする。

## II. 方法

### 1. 対象

#### (1) ADHD群

東北地方A市にあるB公立病院でADHDと診断され、2008年1月から2009年12月までに心理検査を受けた者のうち、WISC-III知能検査の全検査IQが80以上(知能水準分類で「平均の下」以上)の小学4~6年生の児童とその保護者に、研究の主旨と研究発表上の倫理的配慮について説明した上で質問紙調査への協力を依頼した。その結果、22人の協力が得られた。しかし、女子については2人と少なく、統計的分析が困難と判断されたため、今回は男子のみ20人(4年生6人、5年生7人、6年生7人)を分析対象とした。ADHDのサブタイプは、多動-衝動優勢型2人、不注意優勢型10人、混合型8人であり、診断後平均2.1年(0.5~5.0年)を経ている。合併症については極端に不器用とされる発達性協調運動障害および特定の領域の学習が困難とされる学習障害を併せ持つ者が4人、学習障害のみ合併する者が2人いた。調査時20人中18人が、ADHD症状の軽減を目的に塩酸メチルフェニデート(中枢神経刺激剤)もしくはアトモキセチン(選択的ノルアドレナリン再取り込み阻害剤)による薬物治療を受けていた。

#### (2) 非ADHD群

東北地方A市のC公立小学校4~6年生男子のうち、発達障害の診断を受けていた児童を除く96人である(各学年32人)。調査は2006年7月に行なった。

### 2. 質問紙の構成

集中力低下をきたしやすいADHD児が15分程度で回答可能な質問数を考慮し、前田(1997)による「SPCC日本語版」を短縮し、「学業能力」、「運動能力」、「外見」、「行動」、「社会的受容」、「全体的自己価値」(自尊感情)の6領域、各6問より3問ずつ計18問選んだ(表1)。評価については前田と同様、まず肯定(うまくいっている)か否定(うまくいっていない)かを答えても

表1 各領域の質問項目と原因帰属

| 領域                | 質問項目                      | 評価 | 評価の原因帰属           |                |      |
|-------------------|---------------------------|----|-------------------|----------------|------|
|                   |                           |    | 自己                | 他者             | 運    |
| 学業能力              | 1.学校の勉強はうまくいっている          | 肯定 | 自分がもともと得意だから      | 先生の教え方がいいから    | たまたま |
|                   | 2.同級生と同じくらい勉強ができる         | 肯定 | 自分がもともと得意だから      | 先生の教え方がいいから    | たまたま |
|                   | 3.すぐに宿題を仕上げることができる        | 否定 | 自分がもともと苦手だから      | 先生の教え方が悪いから    | たまたま |
| 運動能力              | 4.スポーツは何でもできる             | 肯定 | 自分がもともと得意だから      | 一緒にやる友達がうまいから  | たまたま |
|                   | 5.スポーツは十分うまい              | 肯定 | 自分がもともと得意だから      | 一緒にやる友達がうまいから  | たまたま |
|                   | 6.やったことがないスポーツでもうまくやれると思う | 否定 | 自分がもともと苦手だから      | 一緒にやる友達が下手だから  | たまたま |
| 外見                | 7.自分の身長や体重に満足している         | 肯定 | 自分の外見はもともといいから    | 周りがほめてくれるから    | たまたま |
|                   | 8.自分の外見が気に入っている           | 肯定 | 自分の外見はもともといいから    | 周りがほめてくれるから    | たまたま |
|                   | 9.顔はいい方だと思う               | 否定 | 自分の外見はもともとよくないから  | 周りにけなされるから     | たまたま |
| 行動                | 10.自分の行動に満足している           | 肯定 | 自分が正しいやり方を知っているから | 周りが教えてくれるから    | たまたま |
|                   | 11.いつも正しい行いをしている          | 肯定 | 自分が正しいやり方を知っているから | 周りが教えてくれるから    | たまたま |
|                   | 12.思い通りの行動ができています         | 否定 | 自分が正しいやり方を知らないから  | 周りが教えてくれないから   | たまたま |
| 社会的受容             | 13.すぐに友達をつくることができる        | 肯定 | 自分は友達づくりがうまいから    | 友達が仲良くしてくれるから  | たまたま |
|                   | 14.友達がたくさんいる              | 肯定 | 自分は友達づくりがうまいから    | 友達が仲良くしてくれるから  | たまたま |
|                   | 15.いつも友達と一緒に行動している        | 否定 | 自分は友達づくりが下手だから    | 友達が仲良くしてくれないから | たまたま |
| 全体的自己価値<br>(自尊感情) | 16.今の自分がちょうどいいと思う         | 肯定 | 自分が頑張っているから       | 周りがよくしてくれるから   | たまたま |
|                   | 17.自分に満足している              | 肯定 | 自分が頑張っているから       | 周りがよくしてくれるから   | たまたま |
|                   | 18.自分のやり方はうまくいっている方だ      | 否定 | 自分がうまくいこうとしていないから | 周りがよくしてくれないから  | たまたま |

らい、次にそれぞれにおいて「とてもそう思う」か「少しそう思う」か評定してもらった。肯定で「とてもそう思う」の場合4点、「少しそう思う」3点、否定で「少しそう思う」2点、「とてもそう思う」1点の4段階で得点化し、自己評価得点とした。次に、田中ら（2005）を参考にそう評定した理由、すなわち原因帰属について、自己（例「もともと自分がよくできるから」や「自分が頑張っているから」）、他者（例「友だちがよくしてくれるから」）、運（「たまたま」）の3次元から1つ選んでもらった。

また、ADHD群の母親のみ養育態度に関する質問紙と、母親から見た教師の子どもに対する態度に関する質問紙、小学校入学後のネガティブな体験（いじめや不登校等）の自由記述に答えてもらった。養育態度に関する質問紙は、田研式・親子関係診断検査を参考に保護的態度4項目（「少しの怪我や病気でも非常に心配し、手当をしてあげますか」、「子どもが頼めば大変なことでも喜んでしてあげますか」、「子どもと一緒に外出したり、遊んだり話し合ったりしますか」、「子どものよい面を見つけたら褒めるようにしていますか」）、拒否的態度4項目（「子どもに話しかけられても『忙しいから』とって相手になってあげないことがありますか」、「あまり子どもに相談せずにいろいろなことを決めてしまいますか」、「子どもの頼みや約束をよく忘れてたり、聞いてあげなかったりしますか」、「子どもの行動につきカッとして怒鳴ることがありますか」）を設定した。「はい、いつも」、「はい、時々」、「いいえ」の3件法で、得点が高いとその態度が強いことを示す。教師態度に関する質問は、現在の担任の子どもに対する態度3項目からなる（「先生に叱られることが多いようだ（逆転項目）」、「先生に褒められることが多いようだ」、「子どものことはきちんと理解してもらえていると思う」）。「そう思う」から「そう思わない」までの4件法で、得点が高いと肯定的な態度を示す。

ADHD群は病院で心理検査を終えた後、筆者らが個別に、非ADHD群は小学校でクラス一斉に実施した。その際、質問を正確に理解できるよう前田（1997）が用いたものと類似の絵画を提示し、筆者らが質問を順次読み上げながら回答用紙に記入してもらった。

### Ⅲ. 結果

#### 1. ADHD群と非ADHD群の比較

まず、非ADHD群において各領域の自己評価の信頼性係数（Cronbach  $\alpha$  係数）を求めた。その結果、「学習」0.71、「運動能力」0.9、「外見」0.83、「行動」0.67、「社会的受容」0.85、「全体的自己価値」0.82と概ね高い数値が得られたため、尺度しての内的整合性に問題はないと判断し、ADHD群を含む以下の分析を進めた。

##### （1）自己評価得点

各領域の自己評価について両群間でt検定（対応なし。両側）を行った。その結果、表2に示したように「学業能力」（ $t(111)=2.36, p<.05$ ）、「運動能力」（ $t(110)=3.0, p<.01$ ）、「社会的受容」（ $t(23.31)=3.29, p<.01$ ）、「行動」（ $t(108)=3.71, p<.001$ ）、「全体的自己価値」（ $t(109)=3.89, p<.001$ ）で有意差が、「外見」（ $t(104)=1.95, p<.1$ ）で有意傾向があり、いずれもADHD群の方が低かった。

##### （2）全体的自己価値と他の領域の自己評価との相関

「全体的自己価値」と他の領域の自己評価との間に関連があるかどうか検討するため、相関分析（Pearson, 両側。以下同じ）を実施した。その結果、表3に示したように非ADHD群では「全体的自己価値」は「外見」や「行動」と高い相関が、また「学業能力」や「運動能力」、「社

表2 自己評価得点の平均値と t 検定の結果

|          | 学業能力       | 運動能力       | 外見         | 社会的受容       | 行動         | 全体的自己価値    |
|----------|------------|------------|------------|-------------|------------|------------|
| 非 ADHD 群 | 8.14(1.98) | 8.65(2.37) | 8.13(2.18) | 10.63(1.95) | 8.53(1.78) | 9.05(2.08) |
| ADHD 群   | 7(2.87)    | 6.85(2.06) | 7.05(2.42) | 8.45(2.98)  | 6.85(2.03) | 7.05(2.01) |
| t値       | 2.36*      | 3**        | 1.95†      | 3.29**      | 3.71***    | 3.89***    |

(注 1) ( )は SD

(注 2) † $p<.1$  \* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$

表3 全体的自己価値と他の領域の自己評価との相関

|          | 学業能力   | 運動能力   | 外見     | 社会的受容  | 行動     |
|----------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 非 ADHD 群 | 0.55** | 0.49** | 0.69** | 0.51** | 0.69** |
| ADHD 群   | 0.37   | 0.53** | 0.83** | 0.37   | 0.51*  |

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

会的受容」と中程度の相関が認められた。一方、ADHD群では「外見」と高い相関が、「運動能力」や「行動」と中程度の相関が認められた。しかし、「学業能力」や「社会的受容」との相関は示されなかった。

### (3) 肯定的評価と否定的評価の割合

各領域の肯定的評価および否定的評価の度数を集計し、群間で同等性の検定 ( $\chi^2$ 検定) を実施した。その結果、「運動能力」( $\chi^2(1)=15.03, p<.001$ )、「外見」( $\chi^2(1)=4.59, p<.05$ )、「社会的受容」( $\chi^2(1)=22.13, p<.001$ )、「行動」( $\chi^2(1)=19.93, p<.001$ )、「全体的自己価値」( $\chi^2(1)=26.15, p<.001$ )で有意差が、また「学業能力」で有意傾向 ( $\chi^2(1)=2.17, p<.1$ )があった。いずれもADHD群の方が非ADHD群より否定的評価が多かった。

### (4) 原因帰属

各領域ごとに肯定的評価、否定的評価における自己・他者・運への帰属の度数を集計し、その後これら3次元に均等に帰属すると仮定した場合との同等性の検定 ( $\chi^2$ 検定) を実施した。結果は非ADHD群については表4に、ADHD群については表5に示した。またこれらに基づき、表6に調整済み残差が有意であった(絶対値2以上)次元を抽出した。

非ADHD群では、上手くいっているもしくは満足しているという肯定的評価においては「学業能力」と「社会的受容」で他者への帰属、すなわち先生や友だちのお蔭であるとした者が多かった。一方、「運動能力」と「全体的自己価値」は自己、つまり自分の能力や頑張りに帰した者が多かった。また、「外見」では自己と運に均等に帰属し、他者は少なかった。逆に、上手くいっていないもしくは満足していないという否定的評価においては、「運動能力」で自己への帰属が多かった。また、「運動能力」と「外見」では他者への帰属が少なく、「学業能力」と「外見」では自分でも他者でもない運(たまたま)への帰属が多かった。

ADHD群では、肯定的評価では非ADHD群と同様「外見」で他者への帰属が少なかったが、それ以外に非ADHD群と同じ特徴は見られなかった。否定的評価では、非ADHD群と同様「運動能力」で自己への帰属が多く、「運動能力」と「外見」で他者への帰属が少なかった。しかし、非ADHD群で運への帰属が多かった「学業能力」や「外見」、「全体的自己価値」でも自己への帰属が多かった。

表4 帰属度数と3次元に均等に帰属すると仮定した場合との $\chi^2$ 検定の結果：非ADHD群

| 肯否の評価 | 領域      | $\chi^2$ 値 | 帰属度数     |          |          |     |
|-------|---------|------------|----------|----------|----------|-----|
|       |         |            | 自己       | 他者       | 運        | 合計  |
| 肯定    | 学業能力    | 4.38†      | 42(-1.3) | 71(2.1)  | 46(-0.8) | 159 |
|       | 運動能力    | 14.29**    | 99(3.3)  | 63(-0.4) | 38(-3.3) | 200 |
|       | 外見      | 5.24†      | 62(1)    | 35(-2.3) | 63(1.1)  | 160 |
|       | 社会的受容   | 11.7**     | 59(-2.1) | 116(3.4) | 63(-1.6) | 238 |
|       | 行動      | 2.68       | 74       | 75       | 52       | 201 |
|       | 全体的自己価値 | 6.93*      | 92(2.6)  | 52(-1.6) | 55(-1.2) | 199 |
| 否定    | 学業能力    | 36.9***    | 50(1.3)  | 4(-6)    | 66(3.4)  | 120 |
|       | 運動能力    | 22.4***    | 48(3.7)  | 4(-4.4)  | 24(-0.2) | 76  |
|       | 外見      | 12.91**    | 36(0.8)  | 14(-3.1) | 48(2)    | 98  |
|       | 社会的受容   | 2.38       | 12       | 4        | 10       | 26  |
|       | 行動      | 4.56       | 23       | 13       | 33       | 69  |
|       | 全体的自己価値 | 1.69       | 24       | 13       | 19       | 56  |

(注1) ( )は調整済み残差

(注2) † $p<.1$  \* $p<.05$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$ 

(注3) 分析人数(記入もれを除く):学業能力 93人、運動能力 92人、外見 86人、社会的受容 88人、行動 90人、全体的自己価値 85人

表5 帰属度数と3次元に均等に帰属すると仮定した場合との $\chi^2$ 検定の結果：ADHD群

| 肯否の評価 | 領域      | $\chi^2$ 値 | 帰属度数    |         |         |    |
|-------|---------|------------|---------|---------|---------|----|
|       |         |            | 自己      | 他者      | 運       | 合計 |
| 肯定    | 学業能力    | 0.48       | 11      | 10      | 7       | 28 |
|       | 運動能力    | 2.21       | 14      | 5       | 9       | 28 |
|       | 外見      | 4.6†       | 12(0.6) | 3(-2.1) | 14(1.2) | 29 |
|       | 社会的受容   | 3.81       | 6       | 15      | 19      | 40 |
|       | 行動      | 0.13       | 10      | 9       | 8       | 27 |
|       | 全体的自己価値 | 3.81       | 14      | 6       | 7       | 27 |
| 否定    | 学業能力    | 10.93**    | 20(2.4) | 1(-3.1) | 11(0.1) | 32 |
|       | 運動能力    | 18.32***   | 27(4.2) | 1(-3.1) | 4(-2.)  | 32 |
|       | 外見      | 11.44**    | 23(3.2) | 2(-2.6) | 6(-1.2) | 31 |
|       | 社会的受容   | 1.04       | 9       | 7       | 4       | 20 |
|       | 行動      | 1.01       | 15      | 9       | 9       | 33 |
|       | 全体的自己価値 | 10.34**    | 24(3.2) | 5(-1.7) | 4(-2.1) | 33 |

(注1) ( )は調整済み残差

(注2) † $p<.1$  \*\* $p<.01$  \*\*\* $p<.001$ 

(注3) 分析人数 全領域とも 20人

## 2. ADHD群のその他の結果

(1) 母親の養育態度、教師態度とADHD児の自己評価との相関

表7に示したように、母親の保護的態度はADHD児の「外見」、「行動」及び「全体的自己価値」と正の相関があり、拒否的態度は「社会的受容」と負の相関があった。また、教師の肯定的態度は「学業能力」、「社会的受容」、「行動」と正の相関があった。

(2) 母親による子どものネガティブな体験に関する自由記述

ネガティブな体験の記述がなかった者は5人で、それ以外の15人には以下のような指摘が

表6 各領域における調整済み残差が有意であった帰属次元

|          |    | 学業能力       | 運動能力         | 外見受容       | 社会的        | 行動 | 全体的自己価値   |
|----------|----|------------|--------------|------------|------------|----|-----------|
| 非 ADHD 群 | 肯定 | ↑他者        | ↑自己<br>↓他者   | ↓他者        | ↑他者<br>↓自己 |    | ↑自己       |
|          | 否定 | ↑運<br>↓他者  | ↑自己<br>↓他者   | ↑運<br>↓他者  |            |    |           |
| ADHD 群   | 肯定 |            |              | ↓他者        |            |    |           |
|          | 否定 | ↑自己<br>↓他者 | ↑自己<br>↓他者、運 | ↑自己<br>↓他者 |            |    | ↑自己<br>↓運 |

(注1) ↑は有意に高く、↓は有意に低い次元

(注2) 調整済み残差は絶対値 2 以上を有意と判断した

表7 親の養育態度および教師態度とADHD児の自己評価の相関

|          | 学業能力  | 運動能力  | 外見     | 社会的受容  | 行動    | 全体的自己価値 |
|----------|-------|-------|--------|--------|-------|---------|
| 親の保護的態度  | 0.41  | 0.06  | 0.41** | 0.31   | 0.32* | 0.28*   |
| 親の拒否的態度  | -0.19 | 0.02  | -0.26  | -0.31* | -0.15 | -0.21   |
| 教師の肯定的態度 | 0.31* | -0.06 | 0.13   | 0.39** | 0.27* | 0.27    |

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

あった（複数回答による重複あり）。ADHDと診断される前に家庭でも学校でも叱責されることが多かった；7人，叱責体験の積み重ねにより自信がないあるいは自己卑下の言動（「どうせ僕なんて」「何でも全部自分が悪い」など）が多い；4人，うまく鼻がかめない，運動が苦手，着替えに時間がかかるなど主に運動面を理由に周囲からからかわれた；4人，クラスの友人や上級生から身体的もしくは心理的ないじめを受けた；9人，幼少期からの友人トラブルにより被害感情や他者への攻撃性が強い；1人，過去に不登校（1年に30日以上）を経験した（現在は改善）；1人，過去に医療機関や福祉機関に相談するほどの登校渋りを示した（現在は改善）；2人，現在登校渋りを示している；2人。

## IV. 考察

### 1. 自己評価について

本研究では，SPPC尺度の全領域でADHD群の方が非ADHD群より自己評価得点が低かった。これは，Hozaら（1993）の「行動」，中山・田中（2008）の「振る舞い」，「社会性」，Kaider（2004）の「行動」，「社会的受容」，「学業能力」，「全体的自己価値」よりも多くの領域における自己評価の低下を示すものであった。

その要因として，今回子どもたちのADHD症状及びそれに派生する問題の重篤さが考えられる。今回，多動や衝動性，不注意などADHD症状の他に，読み書き等問題をもつ学習障害（LD）の合併が20人中8人に，また一般的に極端な不器用とされる発達性協調運動障害の合併が4人に見られた。勉強や運動は学校の中で多くの時間を占める活動であり，これらがうまくできないことは教師や友人から肯定的な評価を得られないばかりか，逆に叱責や否定的評価を

受ける機会が多いことを意味する。こうした経験が積み重なると自己評価の低下に影響することが考えられる。さらに、保護者の自由記述から9人がいじめ被害を経験していることがわかったが、これは彼らが友人関係の構築や維持に苦勞していることを窺わせる。登校渋りや不登校など二次的問題を示した5人も、友人関係や学業など学校生活における葛藤を抱えていたと推測される。

また、今回は20人中18人が薬物治療を継続していたが、薬物治療は一般的に環境調整による問題の改善が困難な場合に適用されることが多い(市川2008, 齊藤2008)。医療機関を訪れた段階で、子どもは自分の行動が周囲に歓迎されていないことを認識し、自己不全感や自己否定感を抱いている場合も少なくない(吉田・内山2006)。今回の対象児に対し、医師はいずれにもその子のポジティブな特性を認め、薬物の効果についてもわかりやすい説明をするよう心がけていた。しかし、全児にただちに十分な理解が得られるとは限らず、「薬を飲むのは頭が悪いから」などネガティブな自己認知をしている子どももいた。以上のようなことを考え合せると、今回の対象児はADHD児の中でもより大きな、またはより広い範囲で困難を抱えていた子どもたちであったと考えられ、自己評価の低下が顕著に示された可能性がある。

先行研究では二次障害や薬物治療の有無に関する情報が不明であるため、こうした観点から比較することは難しいが、非ADHD児の中でも多動傾向が強い児童は自尊心が低いという報告(松本・山崎2006)や、抑うつなどの合併症を抱えるADHD児の場合、自己評価が低い(Owens & Hoza 2003; Hoza, Gendersら2004)という知見もあることから、同じADHD児といっても、その症状や抱える困難によって自己評価に差が生じることは十分考えられる。なお、この検証には今後、薬物治療の有無等を考慮した比較研究が必要なことは言うまでもない。

また、自尊感情にあたる全体的自己価値と他の領域との関連については、非ADHD群では眞榮城(2000)とほぼ同様、全体的自己価値は他の領域の自己評価全てと相関があった。他方、ADHD群では運動と外見、行動としか関連がなかった。このことは中山・田中(2008)が指摘しているように、非ADHD児では自身の能力や適性といったものが多様な側面から自尊感情に影響を与えているのに対し、ADHD児ではそれが一部の側面に限られていることを示唆している。さらに、今回関連があったのは主に外的な領域で、学習や友人関係などより内的な側面との関連は示されなかった。学習や友人関係はADHD児にとって苦手な領域であり、自己評価は低くなりがちであるが、他方でHater(1998)やHozaら(1993, 2004)が指摘するように、自己の内面的な傷つきを抑えるため、敢えて低く評価しない子どもも中にはいた可能性がある。こうしたばらつきが、今回の関連のなさの背景となっているとも推測される。

## 2. 自己評価の原因帰属について

非ADHD群では、勉強がよくできるのは先生のお蔭、友人関係がうまくいっているのは友だちのお蔭と考える者が多く、すでにこの時期にこうした領域の成功を他者との関係性において捉えていることが理解できる。またこれは、子どもが自分の価値を意図的に下げることによって、他者の評価を得ようとするいわゆる謙譲の美德を習得していることを示すものと考えられる。

逆に、運動では肯定、否定いずれの評価とも自分に原因を帰す者が多かった。この年齢では、中学生や高校生のように部活動などを通して誰かに熱心に指導を受けている者はまだ少ないと思われる、うまくいっている場合もそうでない場合もともに、その原因は自分にあると考えやすいのかもしれない。他方、勉強と外見における否定的評価については、その原因をたまたまと考えている者が多かった。子どもたちは勉強においては問題が難すぎた、外見においては神

様から与えられたなど偶然性を理由にし、誰のせいでもないと楽観的にとらえているものと思われた。

しかし、ADHD群においては肯定的評価が少ない上、非ADHD群と異なる以下の3つの特徴が認められた。1つ目は、勉強や友人関係がうまくいっていても、それを先生や友だちのお蔭とは考えにくいことである。これは、周囲の叱責やからかい、いじめなどによって他者に対する信頼感が乏しく、それまでの人間関係が希薄であったことが要因と推測される。

2つ目は勉強や外見、全体的自己など多くの領域で、うまくいっていないもしくは満足できないのは自分のせいであると考えていること、3つ目は運動や全体的自己の在りようを肯定的に評価していても、それを自分自身の能力や努力によるとは考えていない場合が多いことである。Seligman & Csikszentmihalyi (2000) は、原因の説明スタイルとして「楽観的帰属様式」と「悲観的帰属様式」があるとし、このうち「悲観的帰属様式」をもつ者は自分にとって望ましくない出来事が起きたとき、その出来事を内的（自分自身に関係がある）で、永続的（これから長く続く）、全体的（あらゆる場合に作用する）にとらえ、逆に望ましい出来事が起きたときは外的（自分には関係ない）で、一時的（長くは続かない）、特異的（特定の状況のみに作用する）にとらえがちであると指摘している。桜井（1989）も、絶望感の強い児童は、いわゆる努力万能主義の影響の下に失敗を自己の努力不足に帰す傾向が強いことを明らかにしている。これらからすると、ADHD群に見られた上記2つの特徴は、対象児の多くがより悲観的な心的状態にあることを窺わせるものである。

ADHD児は基本的に知的能力の低下がないため、普通にできることも少なくない。従って、勉強や望ましい行動も「やればできる」と思われたり、言われたりすることが多く、本人もできないのはあくまで自分の努力が足りないせいだと自分を責め続けているものと推測される。いくつかの領域でこのような自責が高じると、正確な自己認知、自己評価ができなくなり、全体として悲観的な態度が蔓延化していくのかもしれない。ADHD群では外見がよくないのも自分のせいであるとした者が多かったが、これに加え母親が記した「天気が悪いのも何もかも、全部僕が悪いんでしょ」、「どうせ自分なんてだめ。褒められても絶対信じない。後で必ず落とされるから」という発言なども、こうした心理プロセスによっている可能性がある。

### 3. ADHD児の自己評価と親や教師の態度との関連について

今回の調査では、母親の保護的態度とADHD児の行動および全体的自己価値に正の相関があった。これは、親が子どもの要求をひとまず受け入れたり、行動を褒めたりすることによって、たとえ勉強や友人関係など個々の領域で不全感を持っていたとしても、自己の全体的なありようや行動面の評価を低下させないですむ可能性があることを示している。また、逆に母親の拒否的態度は、友人関係と負の相関があった。これらのことから、保護者の保護的で受容的な態度は、自尊心の維持のみならず家族以外の者との社会関係の構築や社会的スキルの習得などにも望ましい影響を及ぼすことが示唆される。

保護者の養育態度がADHD児の情緒的問題に与える影響に関しては、田中（2008）による医療現場での調査があり、33例中23例（70%）に感情的、暴力的、過度に厳格など親の不適切な態度が見られ、その養育下では子どもに96%（22例）の高率で過度の甘え、易努力的、感情表現に乏しいなど情緒的問題が認められたとされている。しかし一方で、発達障害児をもつ母親に関しては、健常児をもつ母親より育児ストレス、育児不安が有意に高い（刀根2002、根来ら2004、庄司2007）ことや、母親の養育態度は子どもの特性や夫、周囲の社会的サポートなどによっても影響を受けることが知られている（小島・田中2007、荒牧・無藤2008）。これらのことから考

えると、安易に親を責めるのではなく、親に課せられた難しい子育てを労いながら育児能力の向上を援助したり、発達段階に即した子育て情報を提供するなど保護者に向けた継続的なサポートを行うことが極めて重要と言えよう。

また、教師の肯定的態度と勉強や友人関係、行動の自己評価には正の相関があった。このことから、教師による障害理解や励まし、称賛等がこの時期の子どもの多領域の自己評価を高め、維持する上で重要であることが改めて確認できる。学校で「思うように集中できない」、「いくら頑張っても覚えられない」、「気をつけていても忘れてしまう」、「つい口を出してしまう」ことなどに困っているADHD児の心情を察知し、具体的なアドバイスを行ったり、子どもの努力に対する労いのことばをかけたりすることが求められているものと考えられる。

#### 4. 今後の課題

今回は対象としたADHD児が20人と少ない上、男児に限られていた。健常児の先行研究では自尊感情は女子の方が男子より低い(松岡・押澤2001, 都筑2005)こと、またADHDに関する先行研究では女子は児童期, 成人期を通して抑うつや不安を生じやすい(Brownら1991, Biederman1998)ことなど男女差があることが指摘されている。今後は、今回得られた知見を女子においても検証し、この時期の女子ADHD児の特徴についても明らかにする必要がある。

#### <付記>

本研究は、平成18年度岩手大学大学院人文社会科学研究科(人間科学専攻・臨床心理学領域)の修士論文の一部として菅原由香が収集した非ADHD群のデータと、その後、佐藤正恵が収集したADHD群のデータを集計、再分析し直したものである。

多大なご協力をいただいたADHDをもつお子様と保護者の皆様、非ADHD群の小学校の皆様により感謝申し上げます。

#### 引用文献

- American Psychiatric Association(2000): Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition Text Revision. (高橋三郎・大野裕他訳(2002)DSM-IV-TR精神疾患の診断・統計マニュアル.医学書院)
- 荒牧美佐子・無藤隆(2008): 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い. 発達心理学研究,19(2), 87-97.
- Biederman, J. (1998): New data on ADD and girls. *Attention*, 4, 38-40.
- Brown, R. T., Madan-Swain, A. & Baldwin, K. (1991): Gender differences in a clinic-referred sample of attention-deficit-disordered children. *Child Psychology and Human Development*, 22, 111-128.
- 榎本博明(1998): 「自己」の心理学-自分探しへの誘い-.サイエンス社
- Harter, S. (1985): Manual for the Self-Perception Profile for Children. Denver, University of Denver.
- Harter, S. (1986): Processes underlying the construction, maintenance, and enhancement of the self-concept in children. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 3. Lawrence Erlbaum. pp. 137-181.
- Harter, S. (1998): The development of self-representation. In Damon, W. & Eisenberg, N. (Ed.): *Handbook of Child Psychology (Fifth Edition)*. Volume 3: Social, Emotional, and Personality Development. John Wiley, New York, pp. 553-617.
- Hoza, B., Pelham, W. E., Milich, R., et al. (1993): The self-perceptions and attributions of attention deficit

- hyperactivity disordered and nonreferred boys. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 21 (3) ,271-286.
- Hoza, B., Genders, A. C., Hinshaw, S. P., et al. (2004) : self-perception of competence in children with ADHD and comparison children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 72, 328-391.
- 市川宏伸(2008) : 3. 注意欠陥・多動(性) 障害. 齊藤万比古(監), 子どもの心の診療シリーズ2 発達障害とその周辺の問題. 中山書店, pp.77-88.
- Kaider, I. (2004) : Predictors of self-esteem in children with and without attention-deficit/hyperactivity disorder. *Dissertation Abstracts International; Section B: Science and Engineering*, 65(5-B) ,2632.
- 上林靖子 (1999) : 注意欠陥多動性障害の併存症として. *精神科治療学*, 14, 135-140.
- 眞築城和美 (2000) : 児童・思春期における自己評価の構造. *応用社会学研究*, 10, 63-82.
- 前田和子・上田礼子(1996) : 幼児の自己概念測定に関する予備的研究 : Hater Modelの日本への適用. 茨城県立医療大学紀要, 1, 7-15.
- 前田和子(1997) : 小学生の自己概念測定に関する研究 - 自己評価得点にみられる性差 -, 茨城県立医療大学紀要, 2, 113-122.
- 松岡英子・押澤由記 (2001) : 中学生の自尊感情を規定する要因—学校生活要因を中心に—. *信州大学教育学部紀要*, 104, 133-143.
- 松本陽子・山崎由可里(2006) : 小学生におけるADHD傾向と自尊感情. *和歌山大学教育学部紀要 教育科学*, 57, 43-52.
- 中山奈央・田中真理 (2007) : 児童の自分が思う自己評価及び他者に映る自己評価が自尊感情に与える影響. *東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報*, 7, 45-57.
- 中山奈央・田中真理 (2008) : 注意欠陥/多動性障害児の自己評価と自尊感情に関する調査研究. *特殊教育学研究*, 46(2) ,103-113.
- 根来あゆみ・山下光・武田契一 (2004) : 軽度発達障害児の主観的育てにくさ感—母親への質問紙調査による検討. *発達*, 25(97) ,13-18.
- 小島未生・田中真理 (2007) : 障害児の父親の育児行為に対する母親の認識と育児感情に関する調査研究. *特殊教育学研究*, 44(5) ,291-299.
- 隠岐忠彦・高田昌子・服部照子他 (1989) : LD児のパーソナリティの年齢による変化. *小児の精神と神経*, 29, 75-83.
- Owens, J.S. & Hoza, B. (2003) : The role of inattention and hyperactivity/impulsivity in the positive illusory bias. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 71, 680-691.
- 齊藤万比古(2008) : AD/HDの治療における薬物療法の位置づけ. *臨床精神薬理*, 11(4) ,587-596.
- 桜井茂男(1983) : 認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成. *教育心理学研究*, 3, 245-249.
- 桜井茂男(1989) : 児童の絶望感と原因帰属との関係. *心理学研究*, 60, 304-311.
- 佐藤正恵(2006) : 病院を受診した不登校児における発達障害の実態. *日本LD学会第15回大会発表論文集*, 300-301.
- Seligman, M.E.P., & Csikszentmihalyi, P. (2000) : Positive psychology: an introduction . *American Psychologist*, 55, 5-14.
- 外山美樹・桜井茂男 (2000) : 児童と成人におけるポジティブイリュージョン. *筑波大学心理学研究*, 22, 191-196.
- 庄司妃佐 (2007) : 軽度発達障害が疑われる子どもを持つ親の育児不安調査. *発達障害研究*, 29(5) , 349-358.
- 田中真理・小島未生・榎本泰亮他(2005) : 注意欠陥/多動性障害児における自己意識の発達(3) - 自己評価に対する原因帰属 -. *日本特殊教育学会第43回大会発表論文集*, 719.
- 田中真理・廣澤満之・滝吉美知香他 (2006) : 軽度発達障害児における自己認知の発達—自己への疑問と障害告知の観点から—*東北大学大学院教育学研究科年報*, 54, 431-443.
- Tanaka, M., Wada, M., & Kojima, M. (2005) : A study of Japanese version of the scale for the self-cognition in childhood and early adolescence. *東北大学大学院教育学研究科研究年報*, 54(1) ,315-337.
- 田中康雄(2008) : 軽度発達障害—繋がりあって生きる—. 金剛出版.
- 刀根洋子 (2002) : 発達障害児の母親のQOLと育児ストレス—健常児の母親との比較—*日本赤十字武蔵野短期大学紀要*, 15, 17-24.
- 堤龍喜・皿田洋子・中庭洋一他 (1990) : 子どもたちの自己認識の発達. *安田生命社会事業団研究助成論文集*, 26(2) ,69-78.
- 都筑学 (2005) : 小学校から中学校にかけての子どもの「自己」の形成. *心理科学*, 25(5) ,1-10.
- 上村菊朗・森永良子・隠岐忠彦(1988) : 学習障害 : LDの理解と取りくみ. 医歯薬出版.

吉田友子・内山登紀夫(2006)：本人の個別カウンセリング－診断名告知を中心に－．齊藤万比古・渡部京太（編）改訂版注意欠陥/多動性障害－AD/HD－の診断・治療ガイドライン．じほう，pp.161-167.